# 『達摩相承一心戒儀軌』の思想の源流

## 『禪宗法語』及び虎関師錬との関係を巡って

高柳　さつき

### 一　『達摩相承一心戒儀軌』[1]について

松ヶ岡文庫所蔵の室町期の写本である『達摩相承一心戒儀軌』[2]は、題名のとおり達磨一心戒に関する儀軌で、十七丁より成る。先行研究としては、玉村竹二及び古田紹欽によるものがある。[3]

本書は「瓶水」、「授仏性戒儀」、「仏乗円頓金剛戒」、「達磨大師付法相承師々血脈譜」、「戒行本尊」、「梵網菩薩戒本印明」、「血脈」、「持戒清浄印」、「三聚浄戒事」、「大乗戒伝来事」、「達磨大師可為伝戒相承」、「道璿和尚相承事」、「日本仏法中興願文」、「斎戒勧進門」、「毎日行事」より成る。[4]

本書のおおよその内容は古田により解説されている。ここでは内容については必要な部分のみ触れ、主に相承について着目する。玉村・古田二氏の論文を参考にし、著者の見解も含めながら流れをみていきたい。

最初の「瓶水」から「戒行本尊」までは、[5]具体的な達磨一心戒の授受に関する儀軌及びその思想に関するものである。

「達磨大師付法相承師々血脈譜」には、

第一祖名尼楼羅王―第二祖名烏頭羅王（中略）垂迹釈迦大牟尼仏―摩訶迦葉―阿難（中略）般若多羅―菩提達磨―北斎慧可―隋朝僧粲―双峰道信―黄梅弘忍―唐朝大通神秀―華厳普寂―大光福道璿―行表法師（澄十二授之出家）―入唐沙門最澄―慈覚大師（中略）源信僧都（中略）証真法印―永尊僧都―永海法印―兼海僧都―宗春僧都―宗直法印―証憲―中訓―天龍太虚―建仁龍統（六オ一～七オ二）

の系譜が記される。最澄までは『内証仏法相承血脈譜』の中の「達磨大師付法相承師々血脈」に基づくので、禅宗は神秀からの北宗禅の相承となる。最澄の後は源信の恵心流の相承となり、そして証真からは証真を祖とする宝地房流（教重の血脈）となり、東塔仏頂尾花王院の天台僧である証憲[6]まで続く。本来は宝地房流は、証憲の後は尊救―静証―証海―仙覚―永賢―定珍と相承するが、こちらは証憲から中訓に相承されている。中訓は夢窓派の禅僧である無相中訓であるが、証憲から中訓にどのような経緯で相承されたかは不明である。天龍太虚は同じく夢窓派の太虚梵仝、建仁龍統は建仁寺霊泉院の正宗龍統である。つまり、日本天台に伝わってきた達磨大師の血脈が、天台宗から夢窓派へ、夢窓派から建仁寺派に受け継がれたことになる。

「梵網菩薩戒本印明」から「持戒清浄印」は、

大聖文殊現虚空中、為明恵上人、授顕密一致法門之時、授此印明。此是従密教眼見之者顕密一致故也。（八オ二～三）

とあるように、文殊菩薩が虚空に現れて、明恵に相承した顕密一致の法門についての印明に関するものである。[7]

「血脈」には、

大聖文殊師利菩薩、明恵上人、義淵上人、明悟上人、円光上人、静基上人、円老上人、静観上人、延文元年丙申九月晦日、於西芳寺釣寂滅菴、以俊倫上人所持本書写之了、倫禅人、先年於太子堂、奉受静観上人西大寺長老周皎奉受資寿院下生長老畢、此本載委細口決之間、令書写之者也、私案凡古徴口伝悉皆仏部印結仏体也。誠夫三古形是人形也。浄三業仏体也。是則仏戒人体哉。可思之。

延文丙申十月一日於西芳釣寂菴私記之周皎

延文第五歳在庚子臘月十日於宇治蔵勝菴以西芳皎和尚御本書写之所冀者欲令一切法界衆生持戒清浄即入仏位而已

肯翁真恵御判（八オ七～八ウ八）

と梵網菩薩戒本印明の相承についての記述がある。まず文殊菩薩から明恵が相承した印明が義淵、明悟…と受け継がれていって西大寺長老の静観に伝わり、それを俊倫が書写したものを、夢窓疎石の法嗣である碧潭周皎が資寿院の下生長老から受けたことを記す。そして、延文五年（一三六〇）に周皎本を夢窓疎石より教えを受けていた肯翁真恵（光明法皇）[8]が書写したとある。

また、次の「持戒清浄印」の末尾には、

先年於臨川寺雖受之、忘却之間、延文元年八廿一、資寿院主受之了、今此印明、高弁上人奉受文殊云々（九オ三～四）

とある。臨川寺で印明を受けたが忘れたので、資寿院主より受けたというのは、「血脈」の記述から判断して周皎となる。

「三聚浄戒事」は主に達磨三論の『観心論』と『破相論』、『瓔珞経』を引用して、三聚浄戒について記す。日本天台において禅に関する経典として受け継がれてきた達磨三論がこのように使われるのは興味深い。「大乗戒伝来事」と「達磨大師可為伝戒相承」は、ほぼ『伝述一心戒文』に基づき、大乗戒の伝来となぜ達磨大師の威儀を伝戒として用いるのかを説明する。「道璿和尚相承事」は、『血脈論』と『菩薩戒経』を引用して達磨の禅法が慧可→神秀→道璿→最澄と伝授されたことをいう。「三聚浄戒事」から「達磨大師可為伝戒相承」には一貫性が見られる。

「道璿和尚相承事」の後には、

応永廿二年二月三日、賜宗澄金剛御本書之了　　中訓（一二ウ九～一〇）

と宗澄の本から無相中訓が受けたとある。宗澄については詳しく分からないが、密教僧であることが分かる。これはあくまで「三聚浄戒事」から「道璿和尚相承事」までのことを言っているとも考えられるが、時系列を考えると、玉村が言うように、明恵の持戒印明も含めて無相中訓が受けた[9]と考える方がより分かりやすい。

次の「日本仏法中興願文」から「毎日行事」までは、栄西に関するものである。

まず栄西の「日本仏法中興願文」全文がある。これは栄西の仏法の再興の宣言ともいえるものである。この中の最後に、

伏乞普賢願王守護三宗、法利乃普済群生者。（一五オ八～九）

普賢願王に三宗（禅宗・真言宗・天台宗）を守護しその利益が群生に救うことを願うとあり、特に重要であると思われる。

次も栄西による「斎戒勧進文」である。これは斎戒を早く修めるべきであるという勧進文である。

「毎日行事」は下記のようにある。

一早晨誦楞厳呪
　報信施檀那二世恩
一日中楞厳呪
　吊先亡伝法聖者、念令法久住利益衆生、住一子慈悲
一晩頭誦安楽行
　報国恩并唯法華三昧願往生浄土
一日日学真言止観義理
　可継法宝恵命
一四時坐禅寅申巳亥
　可現生見諦乃至必値遇千仏出世及窮法界（一六オ八～ウ九）

楞厳呪を唱え、真言、止観を学びそして坐禅するというのは、まさしく栄西時代に行われた建仁寺の日常行事である。

この後続いて、

嘉禎四年三月一日
文永八年十月十三日
応永十九年壬辰中春十七日書之、
文明十五年癸卯九月二十二日、借太虚和尚秘本
写畢（一六ウ一〇～一七オ四）

と奥書がある。年代から考慮すると、嘉禎四年（一二三八）と文永八年（一二七一）は誰によるものか定かではないが、「日本仏法中興願文」から「毎日行事」まで継続的に相承されてきたことが分かる。応永十九年（一四一二）は中訓、文明十五年（一四八四）は太虚梵仝の秘本を借りて写しおわるとあるので、建仁寺霊泉院の正宗龍統のことである。

以上を整理し直すと、「瓶水」から「戒行本尊」までが日本天台における達磨一心戒の具体的な儀軌等、「梵網菩薩戒本印明」から「持戒清浄印」までが明恵の持戒清浄印、「三聚浄戒事」から「道瑢和尚相承事」までが日本天台における達磨一心戒の伝統、「日本仏法中興願文」から「毎日行事」までが栄西に関するものであり、全体として、それらの相承の中心に夢窓派の中訓がおり、中訓から同門の太虚梵仝、そして建仁寺の正宗龍統へ相承されたという系譜になると考えてよいだろう。

玉村によれば、中訓はこの他にも醍醐寺三宝院流に伝わっていた『大日如金口所説一行法身即身成仏経』や『舎利礼文秘訣』という聖教も相承している。[10] おそらく禅だけではなく顕密の様々な教えを積極的に求め嗣法していく禅僧だったのであろう。

太虚梵仝から正宗龍統については、夢窓派から建仁寺への相承である。古田は結論として「叡山に対して建仁寺戒

壇ともいうべきものをひそかに樹立しようと計ったかに見られる」とし、[11] 玉村はよりはっきりと「正宗龍統が、龍山徳見の出現により、密教が否定され、禅旨のみが相承されるようになったのが、黄龍派本来の宗旨をなつかしみ、密教の相承を復興せんとして、太虚に頼って、之を一応成就した」とする。[12] おそらく、夢窓派で受け継がれてきた密教や日本天台で相承されてきた達磨一心戒によって、栄西の時代に立ち返って、禅宗、密教、円教から成る建仁寺を復興させたいということだったのであろう。

では一体、この『達磨相承一心戒儀軌』全体を見たときに、このような習合的な禅思想の源はどこにあると考えられるのだろうか。

## 二　『禅宗法語』との関係

称名寺（金沢文庫）には、二十八丁からなる南北朝の写本である『禅宗法語』という仮名法語がある。[13] 筆者は、『達磨相承一心戒儀軌』の思想的源流を、この『禅宗法語』に求めることができると考えている。

『禅宗法語』という名は、便宜的につけられたもので、もともと金沢文庫にあった法語の抄録の寄せ集めで、昭和三十八年に補修された際に『禅宗法語』と仮題が付けられている。内容は河村孝道の分類[14]によれば、以下から成る。

「発心祈請表白（表白文）」、「明恵上人法語」、「由良開山（法燈円明国師）法語」、「五項目の示衆語が続く（五項目は夢窓疎石の文保二年の老母への返書）」、「正覚国師（夢窓）御歌」、「法語一篇―夢窓によるもの」、「法語一篇―夢窓が北条大方（北条高時の母）に示したもの」、「夢窓の法語一篇―等持寺（足利尊氏）に示したもの」、「法語一篇―夢窓が佐々木六角に示したもの」、「遺誡・辞世頌（肯山という名の僧侶のもの）」

一見して夢窓疎石に関するものがほとんどであることが分かる。他はおそらく明恵による神仏に対する表白分、明

恵と法燈国師（心地覚心）の法語である。

夢窓疎石と法燈国師の関係であるが、夢窓は永仁二年（一二九四）二十歳のとき、既に著名な禅僧でかなりの高齢であった覚心を訪ねて紀州由良の西方寺に向かっている。しかし、京都で会った旧知の徳照にまずは叢林で学ぶように助言され、建仁寺に赴いたとされる。その後の二人に直接の交流はないようだが、共に密教との兼修を行う似たような禅であったためか、法燈派からは夢窓派に転派する者が多くいたことが知られる。[15]

「由良開山法語」は、現在『法燈国師坐禅儀』として知られるものとほぼ同じ内容で、全文が収められる。覚心は悟りの究極的な境地として、以下のように「自己の本分の心」、「本来の面目」、「本分」を掲げる。

自己ノ本分ノ心アラハレテカクレスト申候ハ、タヽ今ノ手ヲアケ足ヲウコカス心スナハチ本分ニテ候也。ソノユエハ此心一念モ生セサルカ故ニ十界ノ心モヲコラス

浄土穢土ノ差別無、父母未生已前ノ面目ト云、又本来ノ面目トモ申ス為リ。（中略）思量計挍オコシテ仏教祖教トヲラスト云事無、直ニ本分ヲ示シ向上ノ宗風ヲアラハス。（一五ウ二～一〇）

これは『夢中問答集』の重要語で、夢窓が悟りの極致を表す言葉として使う「本分の田地」とよく似ている。[16] 法燈派から夢窓派へ、その概念が思想的に受け継がれた可能性、あるいは二派に相通じる禅の悟りの概念があったことを示唆しよう。

以上より、『禅宗法語』は全体としては夢窓疎石あるいは夢窓派に関する法語と考えてよいだろう。

「明恵上人法語」は『明恵上人伝記』の抄録である。『明恵上人伝記』の中には、明恵と栄西の関係に関する説話があることが知られるが、「明恵上人法語」には、その一部が載っている。

栄西が中国より帰朝して、達磨宗（禅宗）を広めていた。あるとき、みすぼらしい姿の明恵が栄西に会いに行く途中で、従者を従え新しい車に乗る栄西に出会い、声をかけられずにいたが、逆に栄西に呼び止められて少し話をした。それからはよく会うようになり、あるとき栄西が「この宗を受け継いで栄えさせることができるのはあなたである。一緒に禅宗を広めて欲しい」と申し出たが、印可を与えられるのを断った。その後、栄西の入滅近くになり袈裟を賜った。また、栄西の弟子の円空が禅定について栄西に聞いたところ、栄西は「明恵こそ禅定を心得ている」といい、円空を明恵の所に教えを請いに行かせた、というのがおおよその内容である。

田中久夫によれば、『明恵上人伝記』には諸本があり[17]、文字の異同等を考慮するかぎりでは本書は高野山親王院本に近い。ところが、最初のみすぼらしい姿の明恵が栄西に会いに行く途中で栄西に呼び止められて少し話をしたまでの出会いの部分は、親王院本にはあるもののこちらにはない。抄録ではあるが、栄西が否定的に捉えられる部分はなく、栄西の坐禅と明恵の禅定が通底することを示す箇所をあえて強調している印象を受ける。

特に注目すべきは、円空が明恵に禅定はいかに修行をすべきか聞いた際、明恵は円空に対し、無所得の心が重要であると教えるが、その際に、

是高弁か私に申にあらず。先年紀州苅磨島にありし時、空中に文殊大士現して予に示給しままに申也。（八オ四～七）

と自分が言うのではなく、昔紀州の苅磨島にいたときに、空中に文殊菩薩が現われて自分に示されたままに申すのだというくだりである。

これは、『達磨相承一心戒儀軌』で、明恵の「持戒清浄印明」が、

大聖文殊現虚空中、為明恵上人、授顕密一致法門之時、授此印明。此是従密教眼見之者顕密一致故也。（八オ二～三）

文殊菩薩が虚空に現れて、明恵に授けた顕密一致の法門についての印明であったことを思い起こさせる。

以上より、本書の夢窓疎石（夢窓派）を中心とし、明恵、栄西との近しい関係という内容は、『達磨相承一心戒儀軌』の習合的な思想とかなり重なっており、元となった可能性がおおいにあると考える。

## 三　虎関師錬による禅宗の位置付けと禅戒

『禅宗法語』が著されたのは、虎関師錬が活躍したあるいはその影響が大きかった時代と重なる。

虎関が『元亨釈書』にて、栄西を禅宗の創始者として位置付けたのはよく知られるが[18]、その際、禅は天台宗の四種相承の一つであるという栄西の考えも含ませる。例えば、

時虚菴敞住万年寺、黄龍八世嫡孫也。初戊子之行、明州広慧寺知賓之者問曰、子之国有禅乎。対曰、我邦台教始師伝教大師伝三宗而帰。方今台密正熾、禅滅者久。西承乏之者也。爾来恨祖意之不全矣。故航海来、欲補禅門之缺。不知、得麼。（『国史大系』三一・四二・一五～四三・二）

万年寺の虚菴禅師のもとにいた際、知客が日本に禅があるかと尋ねると、栄西が伝教大師は三宗（円・密・禅）を伝えたが、今は台密は盛んだが禅が滅んでしまっているので、禅を補うために来たと答えた、というのや、あるいは、

菴問曰、伝聞、日本密教甚盛。端倪宗趣一句如何。対曰、初発心時、即成正覚、不動生死而至涅槃。菴慰誘曰、子言与我宗一般。西、自此尽心鑽仰、親炙者数歳。（『国史大系』三一・四三・二～三）

虚菴が栄西に日本で盛んな密教の特徴を聞き、初発心の時正覚をなし生死を動かさずに涅槃に至ると答えると、虚菴が禅宗と同じであると禅密一致をいうのもそれに通じよう。

また、虎関が禅戒について述べる『禅門授菩薩戒規』では、

此金剛戒、台上葉上、千百釈迦、西天四七、東土二三、南岳、馬祖、百丈、黄檗、臨済、興化、南院、風穴、首山、汾陽、慈明、黄龍、晦堂、霊源、無示、心聞、雪菴、虚菴。惟吾明菴、参遍宋地、台州万年遇着虚菴。受仏心印、授与杖払并菩薩戒、禅一大事。嗟、此大戒、不似余品。達磨大師、合心印伝。是故受者、当生浄信。（『禅学大系　戒法部』「禅門授菩薩戒規」二・三～六）

と禅戒（金剛戒、菩薩戒）が、西天四七、東土二三と受け継がれて、達磨からの相承が栄西に伝わったとする。

ここでは、禅戒と菩薩戒（天台の円頓戒）が同一視されるが、鏡島元隆はこれを虎関の意図的なものとし、栄西が『興禅護国論』で承けた中国禅宗の禅門相承を円頓戒と一つであることにしたのだという。また、その際に光定の『伝述一心戒文』が、達磨がインドより一乗戒を伝えたという主張は、二者を結びつける何よりの救援の論拠となったと述べる。[19] つまり、栄西が主張した日本天台と禅宗の関係を基として、虎関が戒律の相承についても結びつけようとしたことにより、栄西が光定の言う一心戒を相承し、達磨一心戒を提唱したという下地がつくられたことになる。

『達磨相承一心戒儀軌』では、達磨一心戒の理論的根拠として『伝述一心戒文』が多用されるが、その源に虎関の

影響があることは確かであろう。推測ではあるが、「達磨大師付法相承師々血脈譜」にあるように、達磨大師の血脈が、宝地房流に受け継がれていき、虎関の禅戒論を取り入れて達磨一心戒の論理的根拠が形成されていったのではないだろうか。

## 四　『達磨相承一心戒儀軌』の源流

以上、『達磨相承一心戒儀軌』の思想的源流は、南北朝時代の『禅宗法語』に見られる夢窓派の思想潮流と虎関師錬が論じた栄西と天台宗との関係・禅戒の定義の二つがあいまっていることを述べてきた。

重要なのは、『達磨相承一心戒儀軌』が、無相中訓が印明や儀軌等をまとめて相承したものであるとか、建仁寺の正宗龍統が栄西の黄龍派を復興させるために印明等を寄せ集めたものというのではなく、鎌倉時代後期や南北朝時代の頃から受け継がれてきたこれらの思想を相承した蓋然性が高いということである。

拙論のかぎりでは、『禅宗法語』が表された頃に、虎関の論と結びついたのか、あるいはもっと後になってからなのかは明らかではないが、これらの思想が無相中訓や正宗龍統が活動した時代（室町時代後期）まで、絶えることなく継続してあり続けたことは確かである。

近年の名古屋の真福寺（大須文庫）の聖教調査により、従来、純粋禅へ移行するまでの過渡期として考えられていた兼修禅が、いかに思想的に豊かな禅宗の姿であったかが明かされ、日本中世の禅宗観が大きく転換されつつある。[20]

古田は、五山全盛と考えられてきた時代に、『達磨相承一心戒儀軌』のような典籍が存在することを驚きをもって論じるが、[21]現在の研究の進展状況では、驚くという段階ではなくなっていよう。

夢窓疎石と虎関師錬はほぼ同時代に活動しているが、二人の接点はあまりよく分かっていない。二者とも特に密教

との兼修に親和性がある禅僧、派（夢窓派、聖一派）[22]であるので、繋がりがあってよいように思われる。

室町時代の禅宗に関しては、個々の優れた研究はあるものの、全体像は明らかになっていない状況である。今後、『達磨相承一心戒儀軌』のような思想潮流が存在した事実を含めて全体像を捉えていく必要があろう。

先に述べたように、『達磨相承一心戒儀軌』には、数種類の写本が存在する。写本校訂等の調査が必要と思われる。

〈註〉

（1）本稿で使用するテキスト（松ヶ岡文庫蔵版）の旧字体は新字体に改め、テキストの誤り等は適宜訂正する。

（2）筆者の調査によれば、以下の諸本が存在する。

一、内閣、大谷（明治四〇年写）、京大（嘉永七年写）、積翠軒（文明一五年写）書名：一心戒儀軌、角書：達磨相承、著者：栄西

二、花園大今津（寛文九年）　書名：達摩相承一心戒儀軌

三、三康図椎尾　書名：達磨相承一心戒法

四、松ヶ岡文庫（室町、一五世紀半ば）　書名：達摩相承一心戒儀軌

五、両足院（室町、一五世紀半ば）　書名：一心戒儀、表紙「一心戒儀　千光祖師之作」、内題「達磨相承一心戒儀軌　太虚所授余本是也」

一と五は栄西著となっている。中訓著というのもあるようである。ある程度の広がりがあったことが窺われる。

（3）玉村竹二「日本禅宗史の一側面を物語る聖教奥書三則」（『駒沢史学』、一九五九年）、古田紹欽「『達磨相承一心戒儀軌』をめぐって」（勝又俊教博士古稀記念論集『大乗仏教から密教へ』春秋社、一九八一年）。尚、玉村論文は別本（積翠軒文庫旧蔵本）を使っている。

（4）古田前掲論文参照。

（5）古田は「戒行本尊」を明恵の持戒清浄印明の一貫としているが、「大乗菩薩戒、流伝不滅教、真俗一貫法。政道即戒行、三千事法妙…」と始まり、明らかに天台に関する内容なので、前者に入れた方がよい。

（6）聖衆来迎寺蔵の『一心戒口決』（内題・達磨一心戒口決）の奥書には「応永十七庚寅年七廿四日於

叡山東塔東谷仏頂尾花王戒場伝授畢　一心戒口決相承悉一紙顕者也　可為来際亀鏡而已　権少僧都法眼和尚位花王院証憲判」とある（石田瑞磨「一心戒の系譜」『金沢』文庫研究』七二号、一九六一年）。

（7）長円の聞書である『却廃忘記』に「イヅレノ教法も、大小顕密ノ不同アレドモ此義ハ皆仏教ノ定ニ同ジタル也」（『鎌倉旧仏教　日本思想大系』、一〇九頁）と明恵が言っていたとある。

（8）玉村前掲論文。玉村によれば、『蔭涼軒日録抜萃』に夢窓疎石が感応二年に光明法皇に「真常慧」という名を与えたとあること、光明法皇が夢窓疎石から肯翁という道号を受けたことから肯翁真恵は光明法皇になるという。

（9）玉村前掲論文。

（10）玉村前掲論文。『大日如金口所説一行法身即身成仏経』、『舎利礼文秘訣』も共に中訓から太虚梵仝に相承されている。

（11）古田前掲論文。

（12）玉村竹二『五山禅僧伝記集成』（思文閣、一九八三年）三九五頁。また、時代は少し前だが、近年、榎本渉により建仁寺両足院の祖である入元日本僧の龍山徳見（一二八四～一三五八年）が、臨済宗黄龍派の復興を試みていたことが指摘されている（榎本渉「龍山徳見の入元と黄龍派の再興」（『禅文化』二五六号、二〇二〇年）。

（13）高柳さつき「『禅宗法語』解題」『中世禅籍叢刊第一〇巻　稀覯禅籍集』（臨川書店、二〇一七年）参照。

（14）河村孝道「『禅宗法語』解題」（『金沢文庫資料全書　仏典　第一巻　禅籍篇』神奈川県立金沢文庫、一九七四年）。

（15）法燈派から夢窓派へ転派した僧侶は、休翁普貫・古庵普紹・普順・普要・大虚一容等かなり多くいた。また、夢窓の高弟の無極志玄は元々は東寺にいて、その弟子の空谷明応は夢窓が教育したが、わざわざ建仁寺で法燈派の高山堪照について、参禅の傍ら密法を修得させたという（玉村前掲論文）。

（16）夢窓は「本分の田地」を以下のようにいう。「本分の田地は、身心の中にあるにもあらず。身心の外にあるにもあらず。身心全くこれ本分の処なりといふも当たらず。…諸仏・賢聖の智恵、乃至衆生の身心、及び世界国土は、皆この中より出生せり。…知るべし、本分の田地は、真如の妙理、及び一切の仏菩薩の所依なり」（『夢中問答集』講談

社学術文庫、二〇〇〇年、一七七頁）。

（17）田中久文『「禅宗」所蔵の「明恵上人伝記」の抄録』（『金沢文庫研究』一五―一二、一九六九年）。

（18）田中は夢窓派を中心とする五山の禅僧の間で、明恵伝についての説話がつくられて行ったのではないかと推測し、さらに栄西が日本の臨済禅の宗祖のような地位に定められたのは、『元亨釈書』であり、栄西と明恵とが結びつけられるような説話ができたのは、栄西その人の宗祖的地位が確立してからと述べる（田中久文『人物叢書　明恵』、吉川弘文館、一九六一年、二〇八頁）。

（19）鏡島元隆「円頓戒と禅戒」（『道元禅師とその周辺』大東出版社、一九八五年）

（20）その成果は『中世禅籍叢刊』全一二巻・別巻一巻（末木文美士・阿部泰郎編、臨川書店）に収められる。また、調査にまつわる論文を主とした論文集に『中世禅の知』（末木文美士監修、榎本渉・亀山隆彦・米田真理子編、臨川書店、二〇二一年）がある。

（21）古田前掲論文。

（22）平安期の人物である菅原道真が宋に渡り、円爾の師である中国の禅僧、無準師範の弟子となり、法衣を授けられたという渡宋天神伝説は、聖一派、夢窓派、法燈派の近辺ででき、この三派で競い合うようにして広められている（今泉淑夫・島尾新編『禅と天神』吉川弘文館、二〇〇〇年）。

**［参考文献］**

納富常天『金沢文庫資料の研究』（法藏館、一九八二年）

（公益財団法人中村元東邦研究所　専任研究員）